The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞堤和博著『紫式部・定家を動かした物語ー謙徳公の書いた豊蔭物語ー』
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	語文. 2011, 96, p. 75-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69176
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

堤和博著『紫式部・定家を動かした物語
―謙徳公の書いた豊蔭物語―』

丹下暖子

本書は、藤原伊尹（謙徳公）の家集『一条摂政御集』のうち、伊尹が自身を卑官の人物・倉橋豊蔭に仮託し、八人の女との恋を歌物語風に綴った「とよかげ」の部分（豊蔭物語）を取り上げたものである。堤和博氏が一昨年、上梓された『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』と同シリーズの新書である。

豊蔭物語の冒頭の一首は、百人一首にも収載されるものだが、物語自体は、四十一首の小品ということもあり、一般にはあまり知られていない。そのため、本書も内容を紹介し、物語の世界を味わうことに主眼を置く。八段・四十一首すべてに付された口語訳が、その助けとなる。

物語のテーマとして本書で注目するのは、「〈下衆〉の豊蔭と〈上衆めく〉女の変化」、「劇的な展開」である。恋に関して、一途でひたぶるな〈下衆〉の豊蔭の態度と、もったいぶって返歌などを拒み、〈上衆めく〉女が次第に〈下衆〉へと変化する様子を対比的に描くことが第一のテーマであり、時には虚構を施し、「劇的な展開」を伴う物語とすることが第二のテーマだという。二つのテーマが、八段の中にどのように描かれているか、あるいは描かれていないかを問題としつつ、物語を読み解いてゆく。

八段・四十一首を一通り読み終えた後は、先の二つのテーマに注目しつつ、物語の成立過程や、物語を生み出す時代背景に言及する。小品ではあるものの、文学史的にも重視されるべき作品であることが自ずと見えてくる。

「紫式部・定家を動かした」とタイトルに銘打つからには、豊蔭物語が後代に与えた影響についても、いま少し踏み込んだ解説が欲しいように思う。ただし、これは新書の性格上、やむを得ないことであり、氏の著書『歌語り・歌物語隆盛の頃　伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学』（和泉書院、二〇〇七年十月）を読むべきなのだろう。平安期の和歌、物語の世界へと誘う一冊である。

（新典社、二〇一〇年九月、一六〇頁、一〇五〇円）

（たんげ・あつこ　本学特任研究員）